

中国に〈幸福〉はあるか？

緒方 賢一

1. はじめに

「幸福」と聞いてみなさんは何を思い浮かべるでしょうか？家族団らんの光景でしょうか？若い夫婦が赤ちゃんを抱いてニコニコ笑っている光景でしょうか？それとも二時間かけて電車通勤している人が、なぜかたまたまその日に限って電車のシートに座れた日でしょうか？はたまた仕事が終わった後の風呂上がり一杯の瞬間でしょうか？

人によって思い浮かべる「幸福」は様々だと思います。私は今回「中国に〈幸福〉はあるか」というタイトルでお話させていただきます。

このタイトルを見たときに「中国批判をするのだろうか」と考えた人もいるのではないのでしょうか？残念ながらそうではありません。私は普段は中国のだいたい10世紀の宋代以降から最後の王朝清朝までの「近世」と呼ばれる時代の思想史や庭園芸術などを研究しています。毎年中国に行っては庭園調査や図書館での調べ物の合間に観光したり、おいしいものを求めて町をふらふらしている、結構な中国オタクです。まあ、現在の習近平体制に色々な意見は持っておりますが、今回お話ししたいのはそのような内容ではありません。

話をタイトルに戻しますと、中国に「幸福」はあるか？という問いに最初に答えてしまうと「中国に幸福はない」とまずは断言します。もう少し細かく表現すると、「かつて」中国に「幸福は無かった」というべきかもしれません。

さらに言えば、おそらく近代以前の日本にも「幸福」はなかったといえるでしょう。

「幸福」は、西洋では古来それがどのようなものであるのか、学問的に追究されるテーマでした。アリストテレスの『ニコマコス倫理学』では、道徳とは何か、善悪や正義といった、現代においても議論されるテーマとともに、幸福とは何か、その特徴とは何かという課題が取り上げられて検討が加えられています。アランやラッセルの『幸福論』も有名ですし、現在も続々と幸福を論じる書物が出ています。

一方中国においては、この幸福という言葉はほとんど顧みられることがありませんでした。倫理や道徳についての議論がなかったわけではもちろんありません。紀元前6世紀頃に生まれた孔子が「〈仁義〉の仁とは人を愛することである」「知とは人を知ることである」などといった言葉を残したことは、その言行録である『論語』の中に記録されていますし、その後活躍した孟子や荀子がそれぞれ性善説と性悪説を唱えて、「人間の本性は善なのか、悪なのか」に関して検討を加えたことはよくご存じだと思います。

また人間はどう生きるべきかといった「倫理的行為」についても、当時の人々はその時代ならではのやり方で深く考察しています。「仁義礼智」や「孝悌忠信」などの概念を駆使して、親子などの家族関係や夫婦の愛情関係、君臣などに代表される他者との理想的関係はどうあるべきかという議論が儒教では千年以上にわたって行われております。

ただしこの議論に欠落しているテーマがあります。それは今回まさにテーマとなっている「幸福」に関する議論です。

今回のシンポジウムに参加するにあたって、これまで自分が触れた中国学研究をざっくりとですが振り返ってみました。そこで愕然としたのは、学部や大学院の授業において、また研究者の論文を読んでも、中国関係の学会などに参加した時にも、例えば「魏晋南北朝時代における幸福」や「近世中国の誰それにおける幸福概念」といったテーマに接した記憶がないという事実です。

そこで改めて、中国数千年の歴史において「幸福」という言葉、もしくは考えが検討されたことがあったのだろうかということ調べてみました。

台湾の中央研究院という研究機関が運営している、膨大な中国古典を網羅しているデータベース「漢籍電子文獻資料庫」で検索してみたところ、「幸福」の語が「こうふく・しあわせ」の意味に用いられた例はおそらく次に挙げるものが最初です。

「袁世凱遂承皇太后懿旨、宣示中外曰、……（国内に対して）共保治安、重觀世界之昇平、胥享共和之幸福、予有厚望焉。」

『清史稿』卷二十五・本紀二十五・宣統三年

宣統3年の「宣統」とはラストエンペラーで有名な宣統帝溥儀が皇帝の位についていた期間の年号です。西暦になおすと1911年です。なんと20世紀初頭に至るまで中国では「幸福」の語が使用されていないのです。当時総理大臣だった袁世凱が皇太后の命令を受けて発表した言葉の中にこの幸福が使われています。「世界平和を重んじて、お互いに共和の幸福を享受しよう」と呼びかけています。「世界」「共和」などの語は中国の古典を読んでも見ない言葉です。そして「幸福」も同様です。どうも近代以後の語彙が用いられているようだ、私は感じます。ここでピンと来ます。すでに近代日本の言葉が入ってきているな、ということ。どういうことか簡単に説明します。

1895年日清戦争において清朝が破れ、1905年には科挙が廃止されます。清末にはそれまでの四書五経が変わって、数学・地理・科学・音楽・体育などが学ぶべき科目となります。小学校・中学校などの学校が作られて、近代教育が施されるようになります。近代教育とは、西洋式教育のことですが、その際に参照されたのは日本の近代的学問であり教育制度であります。清末の中国知識人はこぞって、東アジアで先んじて近代化を遂げた日本に留学して、西洋の学問を学びます。そしてそこで日本語に翻訳された、つまり漢字に翻訳された西洋の言葉を学ぶことになります。フィロソフィーの訳語としての「哲学」やサイエンスの訳語としての「科学」など、現在でも中国大陸で使用されている学術用語はこの時に輸入されました。おそらくこの時に近代的な「家族観」や「恋愛観」も輸入されています。

では幸福という語が日本でどのように発明されたのかを見てみましょう。

2. 日本の幸福から中国の幸福へ

年代	書名	原語→日本語訳
1855-58年・安政2-5年	『和蘭字彙』	「geluk」→「幸、又果報」
1862年・文久2年	『英和对訳袖珍辞書』	「happiness」→「幸ヒ」
1867年・慶応3年	『和英語林集成』	「ko-fuku」の項なし 「saiwai」→「幸 fortunate、opportune、lucky、favorable、福 good fortune、blessings、prosperity、happiness、good」
1873年・明治6年	『英和字彙：附音插图』	「happiness」→「幸福（サイワヒ）」

江戸時代に編纂された外国語の辞書のうち、上の2つ『和蘭字彙』と『英和对訳袖珍辞書』には「幸い」の訳語がついています。慶応3年の『和英語林集成』では「幸」と「福」の二文字が出てきていますが、まだ両者は離ればなれです。明治6年の『英和字彙』に至ってようやく「happiness」の訳語として「幸福」の2文字が登場します。この訳語は当時の人々に新鮮な驚きをもって迎えられたのではないのでしょうか？西洋には happiness という言葉があって、それは「幸」でも「福」でもない、「幸福」という新しい言葉を使ってしか表せないようだが、と言う思いがここに表れているのではないのでしょうか。

次に中国では古来「幸」「福」の語はどのような意味に用いていたのかを確認していきます。「幸福」という語を使っていなくても、我々が「しあわせ」と考えるような用い方をしているかもしれませんので、それを確認してみます。

3. 中国の幸福

①「兪、吉而免凶也。」（幸は吉にして凶を免るるなり）

②「福、佑也。」（福は助くるなり） ※「示」は神事の意味で、「畐」は音を示す。

許慎『説文解字』

ここに挙げたのは、中国最古の辞書である『説文解字』（「せつもんかいじ」と読みます）に出ている、「幸」「福」それぞれの漢字に関する解説です。

「幸」は今で言う「ラッキー」です。

「福」はどうでしょうか？

中国では「福」の原義は「助ける」です。「助ける」？誰が助けるのでしょうか？天の神です。「福」とは天の神が下す助けなのです。「福」の左側の「示（しめすへん）」がそもそも「神」に関する漢字であることを示しています。それぞれをもう少し詳しく見てみます。

4. 「幸」について

「曾元曰、夫子之病革矣、不可以変。壺而至於旦、請敬易之」

(曾元曰く、夫子の病革〔すみや〕かなり、以て変ずるべからず。幸いにして旦に至らば、敬しみて之を易えんことを請う。)

『礼記』 壇弓

四書五経の一つ『礼記』(「らいき」と読みます)では「幸」の字は「さいわい」と読まれています。ラッキーなことですね。そしてこの「幸はさいわいという意味である」という考え方は、確認したところ清朝までずっと変わりません。そして先ほど見た日本における外国語を解釈する時の言葉として、はじめて「しあわせ」の意味が新たに付加されるのです。

このもとの意味における「運が良かったこと」「ラッキー」というのはイコール「幸福」でしょうか？

例えば、たまたま目の前で起こった交通事故に遭わなかった場合、人はたまたま運がよかったラッキーなことであって、それを幸福と感じる人はいないでしょう。また例えば、太平洋戦争で日本に空襲があった時に、となりの家に爆弾が落ち、自分の家には爆弾が落ちなかったら、それはラッキーでこそあれ誰も自分が幸福とは言わないでしょう。

おそらく他人が大変な目に遭い、自分がそれを免れた場合は「幸福」とはいわないでしょう(もちろん「ラッキー」も口に出せませんが)。ましてや大地震や洪水などで、たまたま自分が助かった場合、それを幸福だとはとても思えないでしょう。

つまり「ラッキー」はイコール「幸福」ではないといえます。

5. 「福」について

「此所為之酒醴、有如椒之馨香、用之以祭祀、為鬼神降福、則得年寿与成徳之安寧也。」

(此ここに為す所の酒醴、椒の馨香の如きもの有り、之を用いるに祭祀を以てするに、鬼神の福を降すと為れば、則ち年寿と成徳の安寧を得るなり。)

『詩経正義』

「福」の語も同様です。ここでは四書五経の一つ『詩経』に唐代の学者が付けた注釈を引きました。祭りをを行うと、鬼神が福を降して下さって、寿命の尽きるまで生きて、自らの徳を達成したことによる安寧を得られると述べています。鬼神とは基本的にはご先祖様の霊を指します。ご先祖様をきちんと定期的にお祭りしていれば、福を降してくれると述べているのです。そうしなかった場合は「わざわい=禍」がもたらされます。これは子孫と先祖の関係における福ですが、皇帝と天神との関係などにも用いられます。皇帝が間違った政治を

行くと、天の神が災いを下し、きちんとした政治を行った場合は、豊作だったり、天変地異がなかったりといった福を降してくれるというものです。そしてこのような福に対する考え方も、先ほどの「幸」と同じく清朝まで変化しません。

「幸」は「ラッキーなこと」で、「福」は「神がくださる助け」だとすると最初に我々が見た「家族団らん」や「風呂上がりの一杯」で感じる「幸福(しあわせ)」は、中国にはなかったのでしょうか？

「いやいや、言葉が無かっただけやろ。我々が使う〈幸せ〉という語が当時なかっただけで、その気持ちを表す言葉はあったはずだ」と思われますか？

では例えば「家族団らん」というテーマで検討してみましょう。

6. 中国の「家族団らん」

最初は四書五経の一つ『書経』の引用です。

「九族既睦」(九族既に睦まじ)

『書経』虞書・堯典

九族が仲睦まじくしているとあります。九族とは自分を中心に先祖四代、子孫四代を含めた一族を指します。その後に表示される家族に関する文献を探してみても「一族が睦まじい」といった文が見られるばかりです。そもそも中国においては「家族」という言葉自体近代以降に成立したという理由もあるとは思いますが、それとはまた別に中国独特の宗族という制度の存在が大きく影響していると思います。宗族とは父系中心の同族集団です。本家と分家が祖先祭祀を中心に、大きな血縁関係で結びついている点に特徴を持ちます。もちろんその中には夫婦や親子の関係も含まれてはいますが、あくまでより大きな宗族という構成体の中の一部として、二次的な役割に甘んじています。そして父親と母親そしてその子供を一まとまりの家族として見る視点は近代に至るまでありませんでした。「夫と妻」という夫婦関係と、「父と子(もしくは母と子)」という親子関係はそれぞれ別個のものとして意識されていたのです。

そして一族は仲睦まじいことが第一だと常に語られます。ただし「仲睦まじい」ゆえに「幸福」であるという展開には残念ながらなりません。

唐の後に起こる宋王朝では宗族が生まれたと同時に核家族が生まれたとも言われています。都市の中に住む人、地方に赴任する人などが、妻と子とともに暮らすケースが増えてきたとわかっています。

南宋の袁采によって編纂された『袁氏世範』という家訓を見てみましょう。そこには次のような項目を見ることができます。

①「人言、居家久和者、本於能忍。然知忍而不知処忍之道其失尤多。」

(人言う、家に居りて久しく和するは、能く忍なるを本とす。然るに忍を知れども忍に処するの道を知らざれば其れ失すること尤だ多し。)

②「同居父兄弟、善悪賢否相半。若頑狠刻薄不惜家業之人先死、則其家興盛未易量也。

若慈善長厚勤謹之人先死、則其家不可救矣。」

(父兄弟と同居すれば、善悪賢否相い半ばす。若し頑狠刻薄にして家業を惜しまざるの人先に死すれば、則ち其の家興盛して未だ量り易からざるなり。若し慈善長厚勤謹の人先に死すれば、則ち其の家救うべからず。)

③「此聖人教人和家之要術也」

(此れ聖人 人に家を和するの要術を教うるなり。)

袁采『袁氏世範』

①は家が長らく和であるためには忍耐することが大事だと説くものです。②は家が長く興隆を続けるためには慈善の心を持った人でなければならないと説明しています。

『袁氏世範』の中には上に引用した文以外にも、夫婦や親子関係における文章はあるのですが、家族に関する言及は見られません。つまり父・母・子供で暮らしている、つまり現代の我々と同じ形態で暮らしている、そこに存在している「家族」観が我々とは異なっているということです。このような形の家族におそらく我々の想像するような家族団らんは存在してはいないでしょう。では一族団らんならばあるのか？という点を考えてみますと、③では「此聖人教人和家之要術也」と「和」という語が用いられています。

家族のあり方に関する言葉をいくつか見てきましたが、どうも家族の目指すべきは「和」であり、また一族が今後も興隆していくことのようにです。近代以前の中国の家は、やはり現代の我々が考えるようなものではなさそうです。

では家以外の場所に「幸福」に類する時や場所はあるのでしょうか？

7. 中国の「幸福」とは？

「喜」(※以下、引用は全て南宋・洪邁編纂の『夷堅志』より)

①「簿妻妹自遠来、相見喜甚。」

(簿の妻妹 遠くより来たり、相い見て喜ぶこと甚だし。)

②「人喜食桃李。」

(人 桃李を食らうを喜ぶ。)

例えば休みの日にカフェでおいしいケーキを食べながらコーヒーを飲む時、寝る前に布団の中で好きな書物を開く時、おそらくそのような時、彼らは「喜び」を感じると言うでしょう。「喜怒哀楽」の「喜」です。

他に「楽」や「安」という語も同じく人生の中で喜びを感じる時に使われる語です。

「楽」

- ①「琴書自為楽。」
(琴書を自ら楽と為す。)
- ②「至泰寧之豊岩、楽其山水秀邃。」
(泰寧の豊岩に至り、其の山水の秀邃を楽しむ。)

「安」

- ①「三婦人皆平安。」
(三婦人皆平安たり。)
- ②「倦極就枕、安眠達旦。」
(倦むこと極まりて枕に就き、安眠して旦に達す。)

琴をつま弾いたり筆をふるったり、大自然のすばらしさを堪能することは「楽しみ」で、何事もないことは「安らか」だと表現されています。

寒い夜に暖かい布団にくるまって眠りに就く時、一日の仕事が終わって帰宅してゆったりとお風呂につかる時の気持ちを彼らはいったい何と表現するのでしょうか？

我々であれば「幸福」という語で表す心持ちは、「和」という語に、「喜」という語に、「安」という語にそれぞれ「分有」、つまり分散して存在していると考えたとよいのではないのでしょうか？

ある人が、無事科挙(官吏登用試験)にも合格し、役人としてある町に赴任して、仕事もつづがなくこなしていて、ある春の晴れた、仕事も休みの日に、妻とお茶を飲みながら、子供が庭で遊んでいるのをともに眺めている瞬間に感じる感覚、それは果たしてどのようなのでしょうか？たとえそこで表される言葉や思考の道筋は、我々と異なるかもしれませんが、この時空を私たちは想像しうるし、共感しうるものでしょう。ここに生まれる感情がどのような言語で表されていても、それが我々が「幸福」という言葉で表現するものとそう遠くはないと一方向的に考えても決して無謀なことではないとは思います。

【参考文献】

- 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』(第2版)龍溪書舎、2002年
荒井健編『中華文人の生活』平凡社、1994年
大澤正昭『唐宋時代の家族・婚姻・女性 婦(つま)は強く』明石書店、2005年
張競『近代中国と「恋愛」の発見』岩波書店、1995年